



創立20周年記念樹 (クロガネモチ)

祝・人文学部創立二十周年

創立二十周年記念樹
 創立二十周年に寄せて
 卒業生からの祝い



第 18 号

発行・鴻文会

山口大学 文理学部 文学科
人文学部 同窓会

山口大学人文学部内
電話 (0839) 33-5200

(連絡事務所)

山口市平井773-2
沖田ビル202

電話・FAX
(0839) 28-4527
郵便振替口座
01500-4-15902

創立二十周年に寄せて

会長 有馬 正人

(西洋史学 文理第四回卒)

「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」を探すのに往生したことがあります。ま(年々歳々花相似たり、歳々年年人同じからず)という名句が「唐詩選」(劉庭芝作)にありますが、今はそんな心境です。人文学部が創設され二十年の星霜を経たことを知り些か感慨に耽っております。思えば我々がキャンパスを去って今年で四十二年、「十年一昔」と云うが、人文学部も生まれて「一昔」を経過したことになります。「若い若い」と思っていたが、最初の卒業生がもう「四十不惑」を超える世代となったということを再認識した次第です。

先ずは後輩諸君に二十年の節目を超えることに對して「おめでとう」とお祝辞を申し上げます。我々の世代は亀山麓の旧制山口高商(経済学部II現美術館)で一般教養を受け、学部に進んでからは糸米旧制山口高校(現山高)、更には旧制山口中学跡(現県公益法人庁舎)と移動した時代です。したがって今の平川のキャンパスは全く馴染みが無く、なんだかヨソの学校に行ったような気がしています。今でこそ鴻文会の関わりで頻繁にキャンパスを訪れるようになってきてやっと違和感がなくなりましたが、十年前前だったと思いますが、校内に入り、人文学部

「紅一点」で「女性ゼロ」のゼミの方が殆どだったからです。学内が何となく爽やかで明るいムードに変わったことは誠に素晴らしいことなのですが、一方何となく男子学生の「覇気」が感じられないの

を戻すのに往生したことがあります。ま(年々歳々花相似たり、歳々年年人同じからず)という名句が「唐詩選」(劉庭芝作)にありますが、今はそんな心境です。人文学部が創設され二十年の星霜を経たことを知り些か感慨に耽っております。思えば我々がキャンパスを去って今年で四十二年、「十年一昔」と云うが、人文学部も生まれて「一昔」を経過したことになります。「若い若い」と思っていたが、最初の卒業生がもう「四十不惑」を超える世代となったということを再認識した次第です。

先ずは後輩諸君に二十年の節目を超えることに對して「おめでとう」とお祝辞を申し上げます。また、私は専攻が西洋史で、「西洋史学のコンパ」の案内があり、私どもの恩師である渡辺真治先生も来られるという事で勇んで出かけた処、驚いたことに大半が女子学生で、「女子大のコンパ」と見まがう雰囲気カルチャーショックを覚えた次第です。我々の時はゼミの中で精々

た。わけて(そうだ人文学部に変ったのだと云た。)と気がついて己の不明を恥じたことがあります。

は私だけでしょうか？これは本学だけでなく男子学生の「軟弱化・中性化」が一般的に見られます。青春を謳歌し、時には蛮勇を発揮するような「友を選ばば書を読み六部の俠気、四部の熱」といった快男児再び現われ出よと切に思います。旧制山高寮歌に「高踏乱舞ヲ愛ズル時、嗚呼鴻南ノ秋ノ歌！」と先達が幣衣破帽を誇り、闊歩したわが山口の街に、平川の姫山の麓、いまのキャンパスは素晴らしい環境と自然に恵まれた学園だと思います。オールドボーイの懐旧談かもしれませんが、我々の時代と比較して全く羨ましい限りです。しかしながら、現在国家財政の逼迫から、国立大学の特殊法人化や委託事業化等の所謂「大学のリストラ計画」が模索されている現在、いつまでも温室の植物のように安閑としておられなくなっており、廣中学長もこのことは大変心配しておられるところです。先日も農林水産省所管の下関水産大学の存廃・運営移管の問題を当地では深刻な事態として取り上げられていると新聞に報じられておりました。当学としてもまた、山口としても安閑としては居られない危惧があります。

旧制山口高校から、文理学部さらに現在の人文学部へと幾多の変遷を経て今日に至っております。「ローマは一日にして成らず」と云われておりますが、人文学部も二十年前に忽然として現れたのではなく、長い歴史の延長線上にあるのであって、そしてその伝統を次の世代に継承させるのが現在の人文学部諸兄の責務だと

思います。

我々卒業生にとっても学園はまさに「心のふるさと」であり、「若き日のミニメント」だと思っております。我が愛する人文学部の次なる三十周年にも是非参加したいと願っております。(その時には私は七十五歳になってるので、現在の健康状態ならばまだ大丈夫と思っております。次の四十周年は多分無理でしょうが…) いずれにせよ我が人文学部が次代に向かつて逞しく発展し、諸兄の中から我が国・世界を動かす幾多のヒーローやロインが輩出し、廣中学長の悲願である「日本の超一流大学」となることに夢を託する次第です。頑張ってください。

(徳山海陸運送(株)顧問)



人文学部棟

お知らせ

山口大学の創立五十周年を記念して下記の記念誌が発行(平成11年4月上旬の予定)されます。鴻文会員の中で購入を希望される方は、下記宛てお問い合わせください。

山口大学庶務部庶務課専門職員
〒753-8511 山口市吉田1677-1
☎ 0839-33-5007 / F A X 0839-33-5013

購入方法などを詳しくお知らせ下さるそうです。なお、購入申込の期限は、通史が平成11年1月25日、写真集・対談が2月10日(期日厳守)になっております。なおセットによる申し込みの場合は1月25日が期限です。

通史

- ・ A 4判 約1,260ページ(上製本、貼ケース入り)
- ・ 単価 5,900円(税込み)
- ・ 構成
 - 第1編 総説
 - 第2編 各学部・大学院ほか
 - 第3編 事務局、学生部、附属図書館ほか

写真集・対談

- ・ A 4判 オールカラー 約220ページ(上製本、貼ケース入り)
- ・ 単価 2,100円(税込み)
- ・ 構成
 - 第1編 写真集(前史、亀山時代から現在の各キャンパス、行事、教育風景、学生生活、交流等々の写真520点(白黒で140点・カラーが380点))
 - 第2編 廣中学長による対談が2本
各学部卒業生代表による座談会



創立10周年記念樹
(ケヤキ)



人文学部玄関

創立から二十年の歩みをたどる

副会長 岡 光 一 浩

(ドイツ語学ドイツ文学 文理第十四回卒)

今年六月、山口大学人文学部が創立二十周年を迎えた。創立当初は人文学科と語学文学科の二学科のなかに二十一の学級の小講座をもち、一年目は教養部で教養課程を学び、その後に専門課程に進級するというシステムであったが、今日、その二学科は人文社会学科と言語文化学科に改称され、一九五名の学生は入学当初から四年一貫の学部教育に沿って、一年目は主に共通教育センターで共通教育科目を、そして二年目から主に九つのコースに分かれて専門科目を履修している。これは、社会の変化や学問の進展に応えるための改編でもある。

昭和五十三(一九七八)年六月十七日、長年の懸案であった文理学部分離改組が実現し、新しい人文学部が発足した。文理学部文学科が発展的に解消されて生まれたこの人文学部は、高等教育の普及に対応して、人文諸科学の専門的知識を学びかつ幅広い教養を身につけた「人間性豊かな有為な人材」を育成するという時代的・社会的要請に応えるものとして成立した。人文学科十二科目、語学文学科九科目の全国的にも極めて広範囲にわたる高水準の、学生数一八〇名、教員数四十三名を擁する新学部となった。翌年十二月、六階建ての人文学部新独立棟

える」という目的で大学院人文科学研究科(修士課程、入学定員八名)が設置されたことであろう。現在まで文学修士の学位の授与者は九十七名にのぼる。

人文学部が誕生しておよそ十年、平成の時代を迎えた頃から、大学は社会の變化や学問の進展に柔軟に対応していくことが求められるようになってきた。そうした時代の要請に応えるためには、人文学部が敷いていた小講座制は専門性と学際制・総合性を共有して、学生の多様な関心に対応して研究と教育の有機的な一体化を実現するためには必ずしもふさわしいものとはいえなかった。社会の変化に対応するため、人文学部は平成五年四月、新しい組織を発足させ、人文社会学科と言語文化学科の二学科に改編し、教官組織として六大講座を、学生の教育組織として六コース(下位区分すると九コース)を置いた。この改編によって、学生は一年次の終わりに所属のコースが決定され、二年次に幅広く学科やコースの授業を履修し、三・四年次には指導教官の指導のもとに専門的な学習や研究を深めることとなった。このコース制の導入により、学生は専門科目を学習するとともに、細分化された教育研究を活性化させ柔軟かつ多様な弾力的なカリキュラムにより、より広い関連分野を学習することが容易になった。しかし、この新しい大講座制、コース制の理念をさらに推し進めるためには教養課程と専門課程を分離する方式ではなく、一般教育と専門教育とを平行履修する四年一貫教育の実現が必要であった。時は全国的に大学教育の体系化を図

るために、一般教育と専門教育との再編の機運が高まっていた。山口大学も平成八年四月、三十年近くも続いた教養部が廃止され、全学出動・全学協力のもとに、それは共通教育センターとしてスタートした。人文学部も四年一貫教育の理念に沿ってカリキュラムの改編が行われ、教養部廃止によって人文学部には十五名の教官が教養部から加わり、教官数六十三名、平成九年七月には人文学部内に異文化間交流の実施と異文化研究を目的として異文化間交流研究施設も併設されたが、とりわけ特筆してよいのは、人文学部が大学と地域との結び付きを深め、地方大のあるべき方向をさぐる試みとして、昭和六十三年に創立二十周年を迎えたのを機に、「開かれた大学を目指し、ともに学習する喜びを」というテーマのもとに、学部内教官による公開講演・公開講座を毎年、県内各地で開催していることだろう。

(人文学部教授)

卒業生からの お祝い

藤 本 由 紀

(旧姓 栗屋)
(国語学 人文第六回卒)

人文学部創立二十周年おめでとうござ
います。

現在三ヶ月になる息子を抱え育休中
の身ですが、人文学部の思い出を書く機
会をいただきましたので、慌ただし日々
の中で少しずつ記憶を呼び戻してみま
した。

私の思い出の中心となるのは、やはり
研究室における様々な活動です。国語
文研究室での演習や購読の準備に四苦八
苦したこと、大学祭で驚流狂言を上演し
たこと等々……。

ただ「人文学部」に属して最も満足で
あったのは、「興味のある分野だからこの
学部に来た」という友人がたくさんいた
ことです。確かに、資格取得のため、就
職のため、という理由で大学や学部を選
ぶことも大切なのですが、それしかない
友人というのは実に味気なく、語り合う
楽しみもありませんでした。人文学部で
できた友人は、それぞれ自分の好きな分
野を持ち、それについて存分に語り合う
ことができました。この充足感は何もの
にもかえがたく、卒業して十年以上たっ

た現在でも私の支えとなっています。
人文学部が「好きだから来た」学生で
活気に満ち、今後益々発展されること
をお祈りいたします。

(下関中央工業高校教諭)

感動とともに

倉 重 加 代

(社会学 人文第九回卒)

昭和六十一年に山口大学に入学、あま
りにもいい加減な動機で社会学を
選択しました。消費税導入、リクル
イト未公開株発覚等を追い風に、参議院選
挙で社会党の女性議員が多数当選し
た年に大学四年生、「パブル」の真
っ只中であつたにもかかわらず、就
職せずに研究室に残りました。それ
もそれほど強い動機ではなかつた。
ために、途中「あの頃就職しておけ
ば良かった」と後悔したこともありま
した。性にあつていたのかもしれない
が、それよりも研究室の居心地が良
すぎたために、結局大学二年次から
八年間も研究室に留まっています。幸
いにも職を得、平成七年四月より鹿
児島女子短期大学(鹿児島市)にて専
任講師として仕事をしています。

相当時間を要しましたが、継続は力
なり、とはよく言ったもので、社会学
の面白さ、醍醐味が自分なりに理解
できるようになりました。今は、何が
何だかわからなかったことがふつと
わかる瞬間、もつれた糸が解けるよ
うな感覚を快感に思っています。

私が進もうと考えていました。しか
し、私が二年目に進んだのは独文の
研究室でした。それからの三年間は
ドイツ語の勉強の勉強も続ける毎日
でした。ドイツ語の勉強も、当初は
単語の勉強も、最初は単語の一つ一
つ全部を辞書で調べなければならな
いような状態でテキストページ分を
訳すのに一時間もかかる程で大変
であつたことを思い出します。今に
して思えば、これも自分にとつてと
ても貴重な経験になつたと思つて
います。

私が進もうと考える今日まで人
文学部を支えてこられた教職員の方
々に感謝するとともに、これからの
人文学部及び鴻文会の益々のご発展
を祈念いたしましてお祝いの言葉と
させていただきます。(防府西高校教
諭)

私が進もうと考える今日まで人
文学部を支えてこられた教職員の方
々に感謝するとともに、これからの
人文学部及び鴻文会の益々のご発展
を祈念いたしましてお祝いの言葉と
させていただきます。(防府西高校教
諭)

岩 尾 健 一

(ドイツ語学・ドイツ文学
人文第十回卒)

人文学部創立二十周年おめでとう
ございます。

私が大学を卒業して既に六年にな
ろうとしております。学部の様子も
在学中と比較すると随分変わらな
かつたことと思つています。私が山
口大学人文学部に入学したのは、十
二年前になつてしまいました。その
入学当時、私は英語を学ぼうと英
語の研究

室に進もうと考える今日まで人
文学部を支えてこられた教職員の方
々に感謝するとともに、これからの
人文学部及び鴻文会の益々のご発展
を祈念いたしましてお祝いの言葉と
させていただきます。(防府西高校教
諭)

二十一年の間に多くの卒業生の方
々が教職についておられると思つ
ています。現在勤務しております高
校でも山口大学人文学部の先輩方
がともに働いておられます。これ
から二十一世紀に向けて多くの
人材を輩出されることと思つて
います。そして今では、人文学部
でドイツ語を学んで良かったのだ
と思つています。

二十一年の間に多くの卒業生の方
々が教職についておられると思つ
ています。現在勤務しております高
校でも山口大学人文学部の先輩方
がともに働いておられます。これ
から二十一世紀に向けて多くの
人材を輩出されることと思つて
います。そして今では、人文学部
でドイツ語を学んで良かったのだ
と思つています。

二十一年の間に多くの卒業生の方
々が教職についておられると思つ
ています。現在勤務しております高
校でも山口大学人文学部の先輩方
がともに働いておられます。これ
から二十一世紀に向けて多くの
人材を輩出されることと思つて
います。そして今では、人文学部
でドイツ語を学んで良かったのだ
と思つています。

宮川 聡 美

(旧姓山本)
(英語学 人文第十一回卒)

この度は人文学部創立二十周年おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

私は平成四年度の卒業であります。学生時代は言うまでもなく、その後におきましても人文学部では大変お世話になりました。と言いますのは、卒業後、英語学・英米文学研究室の先生方のお力添えで文部教官助手として、約一年間勤務させていただきましたからです。今思えば卒業後間もない頃で、社会人としての自覚もなく、先生方には多々ご迷惑をおかけしたであろうと、はかしくなる思いであります。私にとっては思い深い、いろいろな面で大変勉強となった一年間でございます。

主な仕事は研究室、特に書庫の管理と先生方の雑務のお手伝いで、この鴻文会報の編集のお手伝いもさせていただきました。ちょうど山口の町が紅葉で色付く頃、その年の編集委員でいらっしやいました田中晋先生と、会報に載せる写真を撮りに市内を奔走いたしましたの思い出です。遠方で会員の方々がこの会報をご覧になるのですから、懐かしい校舎やパークロード、県庁から市内のながめを撮り、次は新しい物もと、陸上競技場の近くに出来た建物「深亭」(山口県と山東省友好協定締結十周年記念のため送られた物)を撮影したりもいたしました。今は会報をいただく身であります。当

時の思い出や編集委員の方々のご苦労、また変わりゆく大学への期待等、いろいろな思いで拝読させていただきました。毎年手元に届きますのを楽しみにいたしております。

また、この一年間には多くの方々との出会いもございました。第一に所属研究室の先生方や学生の皆さん、さらに物静かで礼儀正しい倫理哲学研究室の先生(私の教官室は倫理哲学の階にあつたので、いつも朗らかに話しかけて下さった事務の方々、仕事以外の事も楽しく相談し合っ短い間ではありましたがたくさんのお出が頭をよぎります。この出会いは私にとっては宝物です。そしてこの一年間は学生時代とはまた異なり、今でも、私の心を和ませノスタルジックな気分になせしてくれる貴重な時間です。

思い出深い人文学部がますます発展いたしますよう、心よりお祈り申し上げます。(防府市立華陽中学校教諭)

濱田 正義

私たちが大学生活を送った時期というのは、ちょうど学部を改革しようという動きの真っ只中にありました。教養部を廃止して、早く専門的な学習をはじめさせる、より専門的な知識を身につけることができるような大学にしようというのが当時の大学をめぐる議論の大勢だったように思います。今でもその傾向は続いて

いて、近いうちに大学は、専門学校や職業学校のようなものになってしまうかもしれません。

いま、社会人となって自分の大学生活を振り返ってみると、自分は一体大学で何を学んだのだろうかという思いがある反面、大学で何か特別にしなくてはならないこ

山口点描

姫山からの風景

山口大学のすぐ側にある姫山から見える風景が変わりつつある。平川方面を眺めれば、田んぼのあとに新しいアパートが次々と建ち並び、二十四時間営業の弁当屋、コンビニエンスストア、さらにはファミリールレストランが登場してきた。大内方面を眺めれば、郊外型大型店が多数登場した。

特に、平川地域の開発は著しく、夜になっても明りが消えない場所は吉田寮だけではない。大学周辺は明りの消え

などないのではないかと、という思いもあります。今年には人文学部ができて二十年目の節目の年にあたるということですが、大学の変化とともに、人文学部がどのように変わっていくのか、見守っていききたいと思えます。(日本放送協会)

ないまちとなり始めている。以前は、のどかという言葉が山口の魅力であったが、それ意外の新しい魅力が着実に増えている。

それでも、姫山から見える大学周辺の屋の風景は、まだまだのどかな田園風景を思わせる。しかし、あと数年もすれば、大学周辺・大内地域の開発がさらに進み、この姫山は夜景が美しく見えるスポットと化するであろうか。



姫山



姫山からみた平川方面の風景

随想

* * * * *

夢の如し

石井 勇

今から一昔も前の話であるが、関西のある大学を定年でお辞めになる英文学の老教授が「訳読人生」という言葉を感慨深げに使用しておられたのを思い起こす。私は山大に来て三十年になる(そのうち二十七年は教養部で過ごした)ので、英語の訳読との付き合いは仮初めのものではない。使用したテキストの多くには手垢とともにそれぞれの思い出がある。なかでも日出版社から出ているルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』、『鏡の国のアリス』はテニエルという同時代の画家による挿絵をふんだんに取り入れていて楽しい読み物であった。

ルイス・キャロル(本名はチャールズ・ラトウィッジ・ドジョンという数学者)の真価がどのようなものか私には殆ど何の予備知識もないが、ノンセンス(無意味、非常識)の横溢する世界がわれわれの見慣れたセンス(意味、常識)を一度無に帰せしめるところが売り物であろう。体裁としては主人公の夢の中の出来事とはいえ、読者を「センス」の牢獄から寸時解き放つてくれるところがミソではあるまいか。ヴィクトリア時代の常識の真つただ中に生まれ育った七歳の少女は次々に起こる不思議な事を、どこか不可解だ

との気持ちを残しながらも、信じてしま

う。たとえば『鏡の国』で、少女は大きな軒をかきながら眠っている王様に出くわす。トイドルダムとトイドルディーという瓜二つの兄弟が言うには、この王様はいまアリスの夢を見ている最中で「王様の目が覚めたら、君は消えちゃうのだー」はとーろうそくみたいになる。

アリスは抗弁する。しかし、返答をする兄弟たちの声が大きいと、「しっ！王様を起こしてしまうじゃありませんか、そんなにさわがたてたら」と言わずにはいられない。

人生を夢にたとえたり、命をろうそくの火になぞらえるのは古今東西によくあるストーリーである。太古のギリシャ詩人ピンダロスにも「人間はひとつの影が夢みている夢」という詩句があるそうだが、七歳の少女にそのような達観を求めても無理というものであろう。『不思議の国』も『鏡の国』も、最後にばつと目を覚ますのはアリス自身であるから消えてしまふのはあれらのノンセンスの世界とそもの住人たちの方である。それにしても先ほどの場面は、夢を見ている少女が更に誰かの夢の中にいるとは正に夢みたな話、これがノンセンスの真骨頂かと勝手に解釈してみたのだが……

因に、訳読作業を通じての学生たちの反応はいまひとつであった。それは当方に先ずノンセンスが放つ面白さがよく理解できていないからだと反省している。恐らくこれは人工衛星から地球を眺めた

く別種の面白さであろうことは間違いない。(人文学部教授)

閑日偶感—私と補助線

佐野 晴夫

高等学校で、自分には理数系の能力が乏しいと自覚させられたが、幾何学だけは意外にも興味をそそられた。三角形に任意の補助線を一本ひくことによって、要求される条件の課題を解決し、証明する作業は心地良かった。数学と無縁となつた歳月のおと、やがて文学研究の領域でも、難問に思われる課題へストレートに肉薄しても解答が得られないとき、意外な角度から単純な一本の補助線を設定することで、解答の目鼻をつけるという経験を重ねるようになった。それを意識したのは、丁度、昭和四十八年春山口大学教養部へ転動して来る前頃だった。当時の教養部には、県立医科大学が国立移管になったのを契機に、文学部から教養部へ移られた教官もおられ、私にとつて快適な時期だった。

従来、トーマス・マンの作品論や作家論を中心に私は仕事をしていた。だが、研究方法的打聞を求めていた。マン研究で、文学理論上の最初の補助線をひいたのは、彼の唯一の戯曲『フィオレンツァ』に先立つジャンル学であった。また前代未聞の一人称の語り手を使用する彼の唯一の韻文叙事詩『おさな児の歌』の解明に際しては人称とパースペクティヴ

の叙述理論を補助線に使用した。彼の長編小説の解明にあたり、『ブッデンブローク家の人々』では形態学的な立場からの「叙述時間」と「叙述される時間」という大概念の時間論を、『ヨーゼフ物語』では「永遠の今」を始めとする神話的な時間論を、『ファウスト博士』では過去と現時と未来が一点で合致する同時性の秘法等を補助線として導入して、作品の物語技術上の本質を究明した。

山口大学にきた直後、まず文学部研究室(今の理学部四階にあった)また付属図書館内の蔵書を調べて、長江藤次郎先生を先頭に歴代のゲルマニスト達が、ゲーデッケの貴重な文献集をはじめ、どうしてドイツ文学史ばかりを集めたのであろうか、という印象を持った。その反対のせいか、教養部では基本的な辞書、全集、叢書、研究書、バックナンバー雑誌を集めることになった。しかし、定年退職七年前になってから、折角、諸先輩が収集されたドイツ文学史の資料を私は黙視出来なくなり、一方で、日本で未だ整理と解説の試みられていない「ドイツ文学史」文献リストを作成すると同時に、他方で、日本で最初の「ドイツ文学史」であると共に、唯一の「国民文学史」を冠した葉山萬次郎の著書を図書館内で見つけ、これを補助線として使用して、「ドイツ国民文学史」の固有の歴史的意義や今日の教育と研究の方向性まで規定した民族的な特異性を浮き彫りにした。旧制高校や旧姓工商の蔵書が残存しているおかげで、シェーラーが同時代のW・ロッシャーの国民経済学の影響をうけて、

彼の実証主義的な詩学を展開している新事実を発見することも出来た。この様な事は、いかなる文芸学の著書にも指摘されていないだけに、国民経済学まで補助線に加わろうとは予想しなかった。マッハをはじめとする自然科学者の思考に接近しようと努めるシェーラーに対して、了解心理学の基盤から、人文科学の独自性を標榜し、精神科学を説いたディルタイの考えこそ、私が盛んに「補助線」と称していた事柄であり、文学作品の理解においても宗教学、哲学、心理学、社会学、政治学、経済学などを総合的に網羅してアプローチする研究姿勢に外ならない。

三年前の教養部改組にともない、私は人文学部へ移った。かつて兼任の文学演習でゲーテやシラー等の講読を担当した時には出来なかったこと、つまり、私の研究して来た一部を、この三年間の講義の中で披歴する機会に恵まれたことを素直に喜んでいる昨今である。

(人文学部教授)

その日が近づいて

山本和之

大学院の中途から文学部に赴任し、とうとう定年までお世話になった。最初はそのつもりではなかったが、住んでみたら山口(大学)が気に入って、結局転出の話には乗らなかつた。後河原の文学部、早間田の下宿、白石の賭屋さん、

いつも勉強のことを気遣ってくれた飲み屋のおばちゃん、みんな親切でやさしかった。

赴任してから数年後、すったもんだの末文学部が改組されて教養部ができた。私も教養部に席を移した。そのうち学生運動が激しくなり、教養部は学生運動各派の活動拠点となった。子供が生まれた夜も大学にいた。クラ討、団交、内ゲバ、カンパ、もう懐かしさの領域に入ってしまった。

文学部に復帰して、文学科が人文学部となった。今回の大学改革までは私なりに比較的落ち着いて教育研究に専念できた。そう思うと、ちょうどいい時に退け時が来たのかも知れない。年取ると、改革後もついつい今までの随性で走ろうとしてしまう。自分を変えるには、環境もすつかり変わる方が諦めがつきやすい。環境が変わったからといって楽になるとは思わないが、とにかく今は新しい職場で勉強の遅れを取り返そうと奮い立っているのである。高齢化社会になったのであるから、七十才、八十才で勝負してもいいのではないか。六十で遅れをとっていても七十で並べばいいのではないか。

人文学部はこれからどうなるのだろう。国立学校の独立行政法人化が現実のものとなれば、予想もしなかつた新しい波に洗われることになる。どんな形になろうとも、とにかく、しぶとく、したたかに生き延びてもらいたい。世の中またいつ変わるかもしれない。文学部では本当にいい同僚、いい学生に恵まれた。これを書く間

も卒業生の顔が走馬灯のようにつきつきと浮かんでくる。連絡が途絶えた子もみんな元気でやっているのだろうか。長い職中、受けたご厚情に倍するご迷惑をおかけしたにちがいない。そう思うと申し訳ない気持ちで一杯である。長い間お世話になりました。

(人文学部教授)

新任教官の紹介

十一年ぶりの山口大学

磯部 佳 宏

(国際コミュニケーション・助教授)

四月より、日本語文化論コースにおいて、日本語学の授業を担当しております。専門の分野は、日本語の文法史・語彙史で、現在、特に、疑問表現を中心とした、中古語から中世語への変遷について研究しています。

山口大学には、かつて、大学院生として二年間在学しておりましたので、十一年ぶりに戻ってきたことになりました。三月までは、八年間、やはり山口県内の女子短大に勤務しておりましたが、日々の雑務に紛れ、山口大学の方へは、毎年五月に開催される人文学部国語国文学会に出席するために訪れる程度でした。かつて在学していたとはいっても、十

年一昔というように、この間、人文学部では小講座制から大講座制へと組織が変更され、また、全学的にも、教養部が解体され共通教育センターとなり、さらなる一部専門科目を一年生が受講するようになるなど、様子の分らないことがいっぱいあります。また、特に、言語文化学科では、女子学生が圧倒的に多くなり、授業によっては、男子学生ゼロのクラスもあるなど、以前とはずいぶん雰囲気が変わっているようにも感じられます。

最近の大学生は、一般的に真面目で素直であり、授業の出席率も良いものの、反面、主体的に行動することは苦手であるとよく言われます。たしかに、大人数の講義形式の授業では、そういう面を感じなくもないのですが、しかし、少人数の演習形式の授業では、発表者は、自主的に問題点を見つけ出し、そのテーマに真剣に取り組んで、発表前には、連日夜遅くまで研究室に残って準備を重ねています。また、その際、上級生が下級生に対して、調査資料や調査方法などについて親切に教えている姿もよく目にします。このような、研究室における学生の姿を見ていると、古くからの伝統が脈々と受け継がれている事を実感せずにはいられません。

研究室で熱心に勉強している学生の姿とともに、遠くの山際に沈んでいく夕陽を窓から眺めていると、本当に山口に戻ってきたことを実感すると同時に、私自身もう一度初心に戻って、研究・教育に取り組んでいかなくてはと、改めて決意を新たにしているところです。

研究室だより

地域歴史文化論コース

本コースは、大講座制実施に伴い、以前の国史学・東洋史学・西洋史学の三專攻を統合し、日本・アジア・ヨーロッパ・アメリカというそれぞれの地域に根ざした歴史文化を学習・研究するために設けられたコースです。学生諸君は、二年生の段階でコースに入り、三年生になって指導教官を決定し、いわゆるゼミ所属を決定します。学生数は毎学年ほぼ定員いっぱい三十名強というところですが、最近、学生諸君の勉強意欲が高まったせいかわりに、昨今の不況のせいで募集が厳しくなっています。大学院に進学する学生も増え、現在十名が在籍しており、それぞれが各指導教官について厳しい指導を受けています。

現在、畑地正憲(担当)・中国古代・近世前期・尼川創一(ヨーロッパ史)・田中誠二(日本近世―近代)・橋本義則(日本古代)・小原豊志(イギリス・アメリカ史)・川端新(日本中世)の諸先生方および滝野(中国近世後期―近現代)がそれぞれ概論・概説、特殊講義、史料・史学講義、演習を担当しています。原史料を自ら丹念に読み、歴史事実について一から自分の頭で考える力を重視するという、小講座時代からの基本姿勢は変わらないうつです。日本史分野の田中先生は萩藩を中心とした社会経済史・政治史の研究を精力的に進めておられますし、毎年恒例の古文書台宿も変わらず続けておられます。ただ、山口という土地柄、明治維

新との関わりのおかげ、田中先生の近世史のゼミに学生諸君の希望が集中する傾向があり、教師が担当可能な教育指導の密度と学生の希望との間の矛盾を提起しています。日本史分野における最近の顕著な傾向は、文献とフィールドワークとの結合ということでしょ。橋本先生は考古学的発掘調査の成果を大いに活用されていますし、川端先生は中世村落的復元を目的とした聞き取り調査を多数実施され、日本中を飛び回っておられます。西洋史分野の尼川先生は、ソ連初期政治史の研究に励んでおられますが、長い間御専門のロシア語で学生を鍛えておられます。小原先生は、南北戦争後再建期のアメリカに関する研究を進めておられますが、今年度ははじめに全国学会においてその成果を報告されました。東洋史分野の畑地先生は全学の共通教育センター長という大変御多忙な身にもかかわらず、講義・演習・中国社会経済史論・アジア文化交流史・概説を担当されていますが、学生を鍛える時間が以前ほど取れないのを嘆いておられます。滝野は相変わらず『世編』・檔案講義と清代常関制・大運河交通に関する研究・講義を続けています。コース制になり、三専攻が統合されたといいますが、すぐに新しい研究室がもたれる訳はありませんので、以前の学部三階の国史学研究室、四階の西洋史学研究室、五階の東洋史学研究室をそのまま使用しています。そのため人文学部の中での関連研究室同士が最も離れたコースとなっております。若干、不便さを感じてはいますが、逆に、以前からの日本史・東

人文学部 教官紹介

洋史・西洋史のそれぞれの分野ごとの学生間の繋がりが、研究室運営は以前と変わらずに続いております。大講座制に移行する前に卒業生の方々は研究室がなくなるのかという質問がございました。しかし、少なくとも学生のまとまりや或いは帰属意識に限りていえば、余り変化はみられないようです。卒業生の皆様

学部長(併)	山本和之
人文社会学	山本和之
国際コミュニケーション	
比較言語文化	沖武磯下太富岩林添松
日本語	田本部寄田平部 田尾
歴史文化	降木林柏脇加高豊上松 矢村 木條藤木澤野本 優武文寧靖和智 正
社会情報	川小滝橋田尼畑 端原野本中川地 矢村
言語文化	山高横外湯瀬佐中小奥近 本橋田山川瀬木村谷津藤
外国語	真征尚紀洋 友典 喬 豊正義誠創正 弓仁俊子司厚衛博子聖一 新志郎則二二憲

外国語	和寺乾フ本平 山 池石根エ飯平阿井平伊田岡石石佐
国際コミュニケーション	沖武磯下太富岩林添松
比較言語文化	田本部寄田平部 田尾
日本語	
歴史文化	川小滝橋田尼畑 降木林柏脇加高豊上松
社会情報	端原野本中川地 矢村 木條藤木澤野本
言語文化	山高横外湯瀬佐中小奥近 本橋田山川瀬木村谷津藤
外国語	真征尚紀洋 友典 喬 豊正義誠創正 弓仁俊子司厚衛博子聖一 新志郎則二二憲

(滝野正二助教)

平成九年度
人文学部卒業生・
大学院修了生進路状況

人文社会学科

建設業
トヨタホーム広島、山口セキスイハイム

製造業
フジッコ、中央出版、みなと山口合同新聞社

卸・小売業
富田薬品、ベルファニー、王将フードサービス、ダイキ、トヨタカローラ山口、ダイエー、サンエーインターナショナル、ビブレ、山口日産自動車

金融・保険業
三和銀行、みどり銀行、広島信用金庫、安田火災海上保険、千代田火災海上保険、レイク、しんわ

サービス業
社会福祉医療事業団、特別養護老人ホーム貴船園、財団法人広島市ひと・まちネットワーク、アリストグループ、総合オリコム社、カクタスグループ、国際観光旅館秋本陣、愛グループ、ウエツブシステム、アルファアミュージズメント、大成社、システム・アナライズ・コーポレーション、ホワイトマジック、濱田重工

国家公務員
家庭裁判所調査官補一種(佐賀)、入国管理局(福岡)、防衛庁三種(海上自衛隊呉地方総監部)

地方公務員
佐賀市役所、長浜市役所、山口市役所、姫路市役所、秋穂町役場、鹿児島県警察、広島県警察

入学年度別学生数

学 科(専攻)	性別	入学年度										計		
		10	9	8	7	6	5	4	3	2	1			
人 文 学 部	人 文 学 科	男	70	43	45	62	10	4	1					235
	計		42	63	66	52	10							233
文 学 部	文 学 科	男	30	14	28	23	8	1						104
	計		78	87	77	81	6							329
学 部	学 科	男							1	1				2
	計								1		1			3
部 合 計	学 科	男							1					1
	計									1				1
部 合 計	学 科	男	100	57	73	85	18	5	3	1				342
	計		120	150	143	133	16		1					563
部 合 計	学 科	男	220	207	216	218	34	5	4	1				905
	計													
人 文 学 部 研 究 科	地 域 文 学 専 攻	男	4	8	1									13
	計		8	4	1	1								13
言 語 文 学 専 攻	男			3										3
	計		3	4										7
部 合 計	男	4	11	1										16
	計		11	8	1									20
部 合 計	男	15	19	1	1									36
	計													

言語文化学科

建設業
山口中央ホーム、一条工務店

製造業
松岡、ソニ・太陽、学習研究社(鹿児島支社)、日之出水道機器、三浦工業

卸・小売業
トーハン、エクセル、ひまわり、エース交易、メガネの田中チェリン、ベスト電器、ホームワイド、大進本店、トーパー、天満屋、島村楽器

運輸・通信業
全日空輸、福岡エア・サービス、鴻池運輸、愛知海運、読売ツアー・サポート、日本電信電話

金融・保険業
広島総合銀行、国際トレーディング、東京海上火災保険、住友生命保険相互会社・福岡すみれい営業センター

不動産業

大学院人文科学研究科

地域文化専攻
京都大学文学部科目等履修生、THK(株)北九州市教育文化事業団、山口ケープルビジョン

言語文化専攻
大阪大学研究生、山口県教員、新潟大学大学院博士課程、山口県教員

フレグインターナショナル

サービス業
大分県公立高校、長崎県内私立高校、学校法人栗本学園、トライグループ、公文教育研究会、オフイスエーゼット慶進塾、九州コンサルタンツ、マイカル九州

国家公務員
税関職員

地方公務員
島根県庁

山口大学 人文学部
公開講演・講座

第十一回公開講演

テーマ ことばと文字
とき 平成10年7月4日(土)
14時30分～16時30分
美祢勤労者総合福祉センター
美祢市教育委員会
共催 無料
受講者 無制限
講師 * 人文学部 教授 松尾 善弘
* 人文学部 教授 林 伸一
* 「ことばの学習」

平成十年度 山口大学 人文学部 公開講座

テーマ 「芸術と文化」
期間 平成10年10月17日～11月21日の
毎週土曜日 六回シリーズ
(毎回13時30分～15時)
ところ 山口大学人文学部
日程・内容・担当講師
10月17日(第一回) 近藤 喬一 教授
「卑弥呼の鏡」
10月24日(第二回) 古賀 信幸 主任主事
「大内氏館と山口のまちづくり」
10月31日(第三回) 「シュリーマン発見のトロイの遺宝」
中村 友博 教授
11月7日(第四回) 「絵を『見る』ということについて」
奥津 聖 教授
11月14日(第五回) 「近代日本画と日本美術院」
菊屋 吉生 助教授
11月21日(第六回) 「ミニマル・アートと主体の変容」
外山紀久子 助教授

平成 9 年 度 事 業 報 告

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1. 第20回役員会 (5月10日) | 6. 「鴻文会会報第17号」発行 (12月20日) |
| 2. 第21回役員会 (6月28日) | 7. 1997年版鴻文会会員名簿発行 (2月25日) |
| 3. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (7月10日) | 8. 学長と山口大学各学部同窓会幹部との夕食会 (3月5日) |
| 4. 鴻文会のホームページ解説 (7月31日) | 9. その他 |
| 5. 鴻文会第5回総会 (8月23日) | |

平成 9 年 度 決 算

収入総額 3,084,381 円 支出総額 2,116,692 円 残額 (次年度繰越金) 967,689 円

収 入 の 部

科 目	当初予算額	決 算 額	比較増減	摘 要
繰越金	221,555 円	221,555 円	0 円	
会費収入	1,060,000	1,035,000	△ 25,000	5,000円×207人
名簿収入	0	0	0	
繰入金	1,208,784	1,821,925	613,141	特別会計から繰入
雑収入	10,000	5,901	△ 4,099	預金利子、寄付金 (5,000 円)
合 計	2,500,339	3,084,381	584,042	

支 出 の 部

科 目	当初予算額	決 算 額	比較増減	摘 要
会議費	150,000 円	80,650 円	△ 69,350 円	役員会、その他
印刷費	250,000	284,095	34,095	会報印刷 (4,000部)、封筒印刷
郵送費	300,000	311,260	11,260	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事務所運営費	810,000	761,100	△ 48,900	家賃 390,000円 (32,500 円×12)、 人件費 331,100円、事務所経費 40,000円 (電話、水道、電話、町内会費)
事務費	100,000	32,870	△ 67,130	祝入学横断幕書き換え・取付撤去費 13,905円、会報発送などアルバイト 謝金 14,000円、消耗品、その他
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
慶弔費	30,000	0	△ 30,000	
総会費	680,000	546,717	△133,283	講演旅費・謝金 154,520円、通信費 326,510円、懇親会費補助 36,000円 その他
予備費	80,339	0	△ 80,339	
合 計	2,500,339	2,116,692	△383,647	

特 別 会 計

科 目	8年度財産	9年度財産	比較増減	摘 要
定額預金(S.63)	600,000 円	600,000 円	0	
定額預金(H.3)	1,000,000	1,000,000	0	
定額預金(H.4)	500,000	0	△ 500,000	解約 599,068円 (うち利息99,068円) 一般会計へ繰入
中期国債ファンド	2,108,784	0	△2,108,784	解約2,111,726円(うち利息2,942円) 一般会計へ1,222,857 円繰入 名簿作成会計へ 888,869 円繰入
合 計	4,208,784	1,600,000	△2,608,784	

平成 10 年 度 事 業 計 画

1. 第22回役員会（5月16日）
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会
3. 人文学部20周年記念事業（植樹）
4. 「鴻文会会報第18号」（人文学部20周年記念別号）発行
5. その他

平成 10 年 度 予 算

収 入 の 部

科 目	10年度予算額	9年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	967,689 円	221,555 円	746,134 円	
会費収入	2,210,000	1,060,000	1,150,000	10,000円×221人分 平成10年度入学者数
名簿収入	40,000	0	40,000	2,000円×20部
繰入金	0	1,208,784	△1,208,784	
雑収入	10,000	10,000	0	預金利子
合 計	3,227,689	2,500,339	727,350	

支 出 の 部

科 目	10年度予算額	9年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000 円	150,000 円	△ 50,000 円	役員会、その他
印刷費	300,000	250,000	50,000	会報印刷（4,000部）
郵送費	350,000	300,000	50,000	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事務所運営費	800,000	810,000	△ 10,000	家賃、人件費、事務所経費（電気、水道、電話、町内会費）
事務費	100,000	100,000	0	会報発送などアルバイト謝金、消耗品、その他
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
慶弔費	30,000	30,000	0	
総会費	0	680,000	△680,000	
記念事業費	300,000	0	300,000	人文学部20周年記念植樹
積立金	1,000,000	0	1,000,000	特別会計へ繰入
予備費	147,689	80,339	67,350	
合 計	3,227,689	2,500,339	727,350	

特 別 会 計

科 目	10年度財産	9年度財産	比較増減	摘 要
定額預金(S.63)	600,000 円	600,000 円	0	
定額預金(H.3)	1,000,000	1,000,000	0	
中期国債ファンド	1,000,000	0	1,000,000	一般会計積立金から繰入
合 計	2,600,000	1,600,000	1,000,000	

追悼
田中晃先生をしのぶ

今年五月に山口大学元学長であり、元文学部長でいらっしやった田中晃先生がお亡くなりになりました。先生の生前をしのび、原稿をお寄せいただきました。

哲学者の生と死

立川和正
(西洋哲学 文理第八回卒)

その葬儀は、非常に感慨深いものであった。

平成十年五月十九日、山口大学二代学長・田中晃先生の告別式である。山口市斎場の式場は、まさに「哲学者の死」にふさわしく、深い濃密な「死を送る空間」であった。

あれが「声明」というのだろうか。四人の僧侶の、ゆったりとした奥深い和音の読経は、時に朗々と、時に哀切を帯びて条々と響き、悲しみをも吸いとってしまふ重厚なものだった。Sein zum Tode (死につつある存在) というハイデガーの言葉をよく口にしておられたが、その通り、声明の中を堂々と住かされてるな、と納得させられた。

九十一歳の大往生であった。先生は、昭和三十三年から四年間、学長職に在られた。当時の山大は、全身校をそのまま各学部とした寄せ集めの「蛸足大学」だった。それを明確なヴィジョンを持って、ハードとソフトの両面を開拓し、名実共に総合大学となる基盤を確立された。その上に、今日の山口大学があるのだ。

その仕事は、相当な荒業であり、激務であったはず。およそ哲学者にはふさわしくない。「よくもあれだけの事が出来たもんだな」と、同席の友人に言うところ、彼は、「先生の回りには、先生に仕事を成し遂げさせてあげたいと本当に思った人や、先生のために何か役立ちたいと思っただ人かなり居たはず。そうでなければ出来ることじゃない」。

なるほど、古代ギリシャでは政治家といえれば哲学者であった。哲学者は、対する相手が何者であろうと、その相手の中から真実を引き出す。こちらが真実にのみ仕える者であるからだ。真実は真実と響き合う。先生はそれを実証されたのだ。先生が米寿を迎えられた年から、かつて講義を受けた教え子が集って、年一回の会を持った。三年続いて終わりを迎えたその会は、単なる一献でなく、哲学の熱が迸る講義を伴っていた。

先生の辞世の歌から一首、
これの世におもひ適へることひとつ
程よきほどに酒は飲みたりー。

(金光教字部東教会会長)

名簿作成会計

収入の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
名簿収入	600,000 円	726,000 円	126,000 円	2,000 円×363 部
繰入金	1,400,000	888,869	△511,131	中期国債ファンドより
合計	2,000,000	1,614,869	385,131	

支出の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
印刷費	800,000	438,270	△361,730	名簿印刷 1,500 部
郵送費	420,000	379,530	△ 40,470	310 円×1,215 部、960 円×3 部 (外国便)
通信費	400,000	404,820	4,820	住所確認
封筒印刷費	60,000	122,640	62,640	封筒 20,300 円、葉書 101,240 円 振込書 1,100 円
名簿入力費	130,000	200,000	70,000	濱田先生 (理学部)
発送諸費	50,000	47,500	△ 2,500	アルバイト謝金
事務費	30,000	9,252	△ 20,748	文具
雑費	110,000	12,857	△ 97,143	お茶・弁当代
合計	2,000,000	1,614,869	△385,131	

同窓会・同期会

社会学同窓会

第二十一回社会学同窓会は、平成十年六月六日(土)、午後四時より、福岡市の博多駅前位置する、博多シティホテルにおいて開催されました。

旧教官でいらっしゃる近沢敬一先生、木下謙治先生、小川全夫先生、故山本陽三先生の奥様でいらっしゃる山本育子様。現教官でいらっしゃる古谷典子先生、横田尚俊先生、高橋征仁先生。以上の方々をお迎えし、総勢三十七名がお集まり下さいました。

昭和三十八年に社会学研究室を卒業された、芳西靖幸同窓会会長より、開会にあたってのご挨拶をいただきました。ご自身もお忙しい中、集うことのできた喜びを語られました。

今回、昭和四十九年に社会学研究室を卒業され、現在、熊本大学で社会学に携わっていらっしゃる徳野貞夫様が、記念講演をして下さいました。高齢化社会である一方、小字化が目立って始めている今の社会を背景に、ご自身の調査・研究等も織り交ぜた、迫力ある講演でした。社会の中で、置き去りにしてはならない大切なものを指摘されると、その都度、なる程と拍手が起る場面が見られました。

同窓会の庶務・会計報告を参加者のみなさまに承認していただいた後、同窓会の新しい名称に関しての話し合いがもたれました。現在、人文学部の改組により、社会学・社会心理学・社会人類学の三講

座で社会情報論コースが構成されております。これに伴い、「社会学同窓会」にも何か名称をつけようと、同窓生の方々から新名称案を募ってまいりました。今年から、名称案の募集が打ち切られる運びとなったため、これまで(平成六年から平成九年まで)みなさまにお寄せいただいた全ての名称案を検討させていただきました。

研究室の近況報告、会員の近況報告と続きました。昭和二十八年に卒業された方から平成十年に卒業されたばかりの方まで幅広い世代のお話が飛び交いました。みなさん、数々のお話やお料理に舌鼓を打ちながら、懇親のひとつときを楽しんでいらっしゃいました。終始笑いの絶えない和やかなご様子でした。

本当に、あっという間に時間は過ぎていったようでした。昭和二十八年に社会学研究室を卒業された、竹田守恵同窓会名誉会長より、閉会にあたってのご挨拶をいただきました。社会学同窓会を発足された頃のご苦労を語られました。会幕を閉じましたが、まだまだお話は尽きないご様子で、時間の許せる方々は、二次会の場所へと移動されました。

最後になりましたが、福岡で同窓会を開催するにあたり尽力してくださった、昭和三十七年に卒業された後藤文利様、昭和五十二年に卒業された武藤辰喜様に厚く御礼申し上げます。

次回の同窓会は、平成十一年六月五日(土)、山口での開催を予定しております。みなさまのご参加を心よりお待ちしております。お待ちしております。

村岡睦子(社会心理学 人文第十三回卒)

文理第一七回生同期会

去る十一月七日、責任幹事の脇正典氏のお世話で、私も昭和四四年三月の卒業生(一七期生)の第五回目の同窓会が開催された。会場はなつかしの「惣野旅館」である。参加者は石原、川上、実兼、添田、弘中、向井、森川、薬師、脇。今年卒業後三十年だった(お互いの顔を見合わせて気付いた)のだが、九名の参加に止まった。まことに残念である。

ただ、今回は、ご両親のご病気や身回りの世話という「家庭の事情」で「やむを得ない欠席」が特に目立った。そういう年回りになったのだと思う。それ以上に、常任幹事(いつものまにか常任幹事に祭り上げられている)の私の不手際原因がある、皆が口を揃えてそう言う。

「今回は八月の第二週の土曜日(お盆の前(次回後半?)に開催しよう」という前回の約束を私は全く忘れていた。七月の初めに案内が届いて同期会までの間が空き過ぎ、返事が半数しか返ってこなかった。七日は全国大会の催しがあり宿所も取れなかった。それらもまた原因の一つ。

五時から九時半までの間、時間の過ぎるのを忘れて歓談した。幹事批判に費やされた二時間以外は実に愉快であった。次回の世話係は英文学(石原、川上、森川)ということになった。新世紀の二〇〇一年の八月の第二土曜日に再び「惣野旅館」にご集合ください。宿所も惣野旅館でOKです。勝手な提案ですが、二時問くらい前に集合して、亀山とサビエルと香山園との坂川を散策しませんか?

「同窓会をしたいですね。」そんな私の年賀状の一言に、快く同意し、協力してくれた心優しい後輩のお陰で、平成十年十月十日、山口市内、メディアアブラザーFにあるレストランで昭和五十六、五十七、五十八年度、英語学・英米文学専攻卒業生の同窓会を開催することができました。

英語学同期会

文理第二九、三十回生
人文第一、二回生
七年ぶりの同窓会

出席者の内訳は、文理学部第二十九回卒七名、同第三十回卒一名、人文学部第一回卒二名、同第二回卒十一名の計二十一名、それに欠席する代わりに仙台から送られてきた笹かまぼこが一箱。更に、現人文学部長の山本和之先生、山大を退官された後も現役で教鞭をとっておられる和田敏英先生のお二人をむかえてにぎやかにほじまりました。

山本先生は、今年度いっぱい山大を退官されるそうで、是非それまでに開催しようとして、夏のはじめのころから準備を進め、この日を迎えました。同窓会に出席するのは、卒業以来初めてだと言う人もいましたが、青春の時を少人数の研究室で過ごした者同士、不思議なくらい違和感もなく、終始和やかに話が弾み、あっという間の二時間でした。

私自身、子育てだけで精一杯だった三

なお、久方ぶりの惣野のおばちゃん(もうお姉さんではないが)はお元気でした。

十代が終わわり、一つの節目と考える四十代となって、残り半分?の人生をどのように生きてゆこうと思案する毎日です。そんな時に懐かしい人々に会い、様々な会話をするうちに、学生のころの自分を思いだし、励まされ、まだ何かできそうな力をもらった気がしました。

「これからの日々、坂道を転がり落ちるが如く、ですよ。」との和田先生の御言葉を胸に、努力してゆこうと思っています。今回の反省を次回につないで、何年か後に、より多くの皆さんにお会い出来ますように。有り難うございました。

大鶴 史子(旧姓 峯平)
(英語学・英米文学 文理第二十九回卒)

御退官記念講演会のお知らせ

御高承のとおり、石井勇、山本和之両教授には平成十一年三月末日を以て定年御退官のこととなりました。つきましてはこの機会に両先生の御講演を伺いたく左記のとおり計画致しました。ふるって御参加下さいませよう御案内申し上げます。

日時 平成十一年二月二十日(土)
午後三時
場所 山口大学 大学会館大ホール
演題 「文学とのつき合い」 石井先生
「顧みれば」 山本先生

なお、引き続き会館レストランで懇親会を予定しております。同窓の諸兄弟には別途ご案内申し上げます。
(英語学・英米文学教室)

社会学同期会

人文一・二・三期生

平成十年八月十四日午後二時から、山口駅前青柳旅館で、社会学系研究室人文一〜三期の卒業生三十余名が集まり、同窓会を行いました。

この集まりは、研究室主催の同窓会とは別に、不定期に開催しているもので、今回で三回目(?)になります。誰かが思い立ったときが集まり時ということで、毎回適当に開催しています。今回も、開催の話は半年以上も前に出ていたにもかかわらず、各学年幹事の怠慢で、開催の通知は三週間前といういい加減さでした。

当日は暑い中にもかかわらず、福岡県立大学の木下謙二先生、九州大学の小川全夫先生、研究室の小谷先生に出席していただきました。佐々木先生は中国出張中で、残念ながら出席いただけませんでした。

一次会では、それぞれの近況報告、懐かしい写真・研究室ノートの回覧などもあり、楽しいひとときを過ごしました。アツという間に一次会の予定時間が過ぎ、イヌの散歩があるからと二次会で帰ったU君を除き、ほとんどが二次会に参加しました。

会は二次会、三次会と続き、時の経つのも忘れて話に花を咲かせましたが、さすがに、学生の時のようにカラオケをバツクに踊りまわるといった光景はありませんでした。少し大人になったようです。

皆、卒業後十五年以上経ち、三十代も半ばを過ぎると、体型と同様、そこそこに落ち着きみたいなのが出て、立派な中年予備軍になっていました。

会は流れ解散の形になったので、最後の人が何時までやっていたのか定かではありませんが、とりあえず夜遅くまでお疲れさまでした。

次回はいつになるか全く未定ですが、その時まで元気に頑張りましょう。次回の代表幹事は、今回、日を間違えて参加できなかったH君にお願いしようと思っております。

五百川 和徳
(社会学 人文第一回卒)



人文学部小講義室隣にできた売店

*** 編集後記 ***

・人文学部創立二十周年記念として「鴻文」第十八号を捧げるとともに学部正面玄関右側にクログネモチを植樹しました。
・来年六月山口大学は創立五十周年を迎えます。そのための「山口大学五十年史」の編集が鋭意進められています。四月二十三、二十四日にはその祝賀式典や講演会などが関係者を招いて盛大に挙行される予定です。鴻文会も他の同窓会と協力してこの祝賀を盛り上げるべく、現在、山口大学連合同窓会に出席してその協議に加わっています。

・幹事として長年同窓会の発展に尽くして来られた社会人類学の佐々木衛教授が、来春より神戸大学文学部にご栄転になります。学部にとっては勿論のこと、鴻文会の役員会にとっても寂しく大きな痛手ですが、これからのご発展とご健康を祈りたいと思います。(〇)

初めて編集という仕事に携わり、作業が大変もたついてしまいました。毎年、この作業を行ってこられた学内幹事の先生方には、大変頭が下がる思いです。

今回の会報は、人文学部二十周年を記念して鴻文会でもそのお祝いをしようという事になり、会報を企画しました。突然、こちらの都合で原稿の寄稿をお願いしたにもかかわらず、快く御協力下さった方々に深く感謝し、紙上をかりて厚くお礼申し上げます。

学内の近況と致しましては、人文学部小講義室隣の駐輪場の一面に売店ができました。学生も教職員も便利になったと喜んでおります。(H)